

初対面日本語会話の話題開始部 / 終了部において 用いられる言語的要素

中 井 陽 子

キーワード

話題開始部, 話題終了部, 情報提供者, 協力者, 言語的要素

1. はじめに

日本語非母語話者が日本で生活する際、初対面の日本語母語話者と接触する機会が多いと考えられる。しかし、その際、談話能力の不足から、自分が意図したことに反して、過剰によそよそしく見られたり、あるいは、なれなれしく見られたりなどし、思わぬ誤解や印象を相手に与えてしまうことがある。初対面では、人間関係がまだ十分に構築されていないので、会話をする際も様々な注意を払いながら話題が進められていると考えられる。したがって、非母語話者が初対面の出会いをより良い人間関係につなげていくためには、文法能力だけでなく、いかに話し手 / 聞き手として会話に積極的に参加しながら話題を開始し、終了していけるかという談話能力も必要であると言える (cf. Kato [Nakai] 1999, Nakai 2002, 中井 2002, 2003a)。そのためには、まず、日本語母語話者同士の会話がどのように構成されているか探り、非母語話者のそれとの違いを分析する必要があると言える。

Kato [Nakai] (1999) では、このような点を考慮に入れ、初対面の母語話者同士と母語話者 / 非母語話者が日本語で会話をする際、話題開始部及び終了部においてそれぞれがどのような言語的要素をどのように用いるのかについて比較分析した。本研究は、そのような総合的研究を行った第一段階である日本語母語話者の部分だけをさらに詳しく分析するものである。その際、初対面の日本語母語話者の会話で起こる言語使用の現象を記述し、それがどのように用いら

れているかを検証し、その傾向を探る。なお、本研究では話題開始部と終了部の間にある中間部は分析対象として扱わなかった。

2. 先行研究

本研究は、南（1972, 1983）の「談話」とザトラウスキー（1991, 1993）の「話段」の概念を採用し、話題としてのまとまりの区切れ目で話者がどのような言語的要素を用いているかを検証するものである。南（1972, 1983）は、言語表現における「一つの仮定的単位」として、「談話」という単位を提案し、談話は、「切れ目（ポーズ）」、「連続性」、「参加者（の一定性）」、「コミュニケーション上の機能（の一定性）」、「ことばの調子（の一定性）」、「話題（の一定性）」の6つの基準で区切ることができるとしている。ザトラウスキー（1991, 1993, 1998, 2002）は、市川（1978）と佐久間（1987）を基に、南の「談話」の下位単位として、「話段」という単位を分析し、「談話」と「話段」における始まり及び終わりで用いられる言語的要素について検証している。ザトラウスキー（1993: 72）では、話段は「話題・発話機能・音声面における特徴がある」と述べている。

本研究では、話題開始部及び終了部における参加の仕方を比較対照するため、ザトラウスキー（1993:154）の情報提供者と協力者の区別を採用して分析した。情報提供者とは、主に、情報提供に関する発話機能を用いる参加者のことを指す。例えば、注目要求、談話表示、情報提供、意志表示、同意要求、単独行爲要求、共同行爲要求、言い直し要求、関係作り・儀礼、同意の注目表示、自己注目表示等のような発話機能を用いる。また、協力者とは、情報提供者に協力し、情報要求、言い直し要求、言い直し、関係作り・儀礼、継続、承認、確認、興味、共感、感情、感想、否定、終了の注目表示等を用いて話段を作り上げる参加者のことを指す⁽¹⁾。

(1)は、ザトラウスキー（1993）が分析したお茶会の誘いの談話における勧誘の話段である。参加者Nは勧誘者であり、「11N ああね？（注目要求）」「17N ええと、7月の3日。（情報提供）」等の発話機能を用いているので、情報提供者であるとしている。一方、参加者Iは被勧誘者であり、「12I うん。（継続の注目表示）」「16I いつ？（情報要求）」等の発話機能を用いているので、協力者であるとしている。

(1)	勧誘者の発話機能 [情報提供者]	被勧誘者の発話機能 [協力者]
11N あのね？	注目要求	
12I うん。		(継続) の注目表示
13N あのー、も、多分、い、ん、 どうかなあと思うんだけど、	情報提供	
14N またお茶会があるだけ / / ど、	情報提供	
15I うん。		(継続) の注目表示
16I いつ？		情報要求
17N ええと、7月の3日。	情報提供	
18I 7月のみっ / / ーか。		(確認) の注目表示
19N うん。	(同意) の注目表示・情報提供	

(ザトラウスキー1993 別冊:20)

3. 分析

3.1 会話資料

本研究で分析した会話資料は、初対面の20～30代の二人の日本語母話話者による約15分間の会話を3会話(男/女, 女/女, 男/男), 米国某大学において録画したものである。参加者(全6名)は、撮影当時、アメリカ旅行中の日本人一人を除いて、全員が米国某大学の大学生または大学院生であった。撮影当日、録画用の部屋の中で、参加者2人だけで自由に会話をしてもらい、15分後に筆者が参加者のうちの一人の名前を呼んだら、その参加者が適当に会話をまとめて終わるように指示しておいた。いずれの会話も録音、録画した。録音用にはチップマイクをそれぞれの参加者の服に付けてもらい、小型テープレコーダーを2台使用して、それぞれの参加者の声を録音した。録音用には8ミリビデオを1台用意し、テーブルマイクをそれに接続して録音もした⁽²⁾。撮影後、いずれの会話もすべて文字化した⁽³⁾。【表】に参加者の属性をまとめた。

【表 I】 会話参加者の属性

	参加者(仮名)	出身地	性別	年齢	職業 / 学年	米国滞在期間
会話1	富士男(F)	愛知県	男性	21	大学3年	米国滞在: 3年
	小夜(S)	大阪府	女性	28	修士課程 日本語TA	米国滞在: 5年
会話2	八重(Y)	神奈川県	女性	32	大学4年	米国滞在: 2年半
	彩子(A)	千葉県	女性	27	修士課程	米国滞在: 3ヶ月
会話3	啓二(K)	北海道	男性	25	日本の会社員	米国滞在: 1ヶ月旅行
	次郎(J)	東京都 / 米国ミネソタ州	男性	27	修士課程	0-3歳: 滞在 4-24歳: 毎夏滞在 米国留学: 5年

3.2 話題区分

本研究の話題区分調査は、鈴木（1994，1995）を参考に行い、それぞれの会話ごとに、その会話に参加していない5人の被調査者⁽⁴⁾に対して録画した会話を2度見せ、話題の切れ目⁽⁵⁾と話題のタイトルを書いてもらった。そして、3人以上が一致したものを無条件に話題区分に含めた。ただし、各話題区分の近くに同じようなタイトルが全部で3つ以上ある場合は、前にある方の話題区分を採用するか、または、筆者が適切だと判断する区分を採用して、話題区分として分析対象とした。さらに、2人しか一致していないが、前後の関係から明らかに大きい話題として中に小さい話題を含んで統括しているもの、または、前の話題から区別されるものと筆者が判断したものを話題区分とした。この結果、会話1，2，3には、それぞれ、11，28，23話題が認定された。また、会話例の中の話題区分の場所には線を引き、話題のタイトル番号の他、話題区分一致人数と一話題中の発話番号範囲もそれぞれ括弧に示した。

なお、本研究では、この話題区分調査で区分されたまとまりを「話題」と呼ぶことにする。各会話の話題区分とタイトルを【表】にまとめた。

【表Ⅱ】 話題区分と話題タイトル

会話1(富士男と小夜) 発話番号(1-549)	会話2(八重と彩子) 発話番号(1-862)	会話3(啓二と次郎) 発話番号(1-610)
1. 自己紹介(5Ⅹ1-23)	1. 挨拶、自己紹介(5Ⅹ1-11)	1. 挨拶、自己紹介(5Ⅹ1-17)
2. コミュニティカレッジ (3Ⅹ24-76)	2. 身分(3Ⅹ12-33)	2. 啓二が何度アメリカに来たか (4Ⅹ18-31)
3. 出身地(5Ⅹ77-102)	3. 彩子のこれまでの歴史(3) (34-57)	3. 今日の寒さ(4Ⅹ32-40)
4. 富士男の出身地(愛知) (3Ⅹ103-162)	4. 八重のこれまでの歴史(1+5) (58-112)	4. カヌー(5Ⅹ41-66)
5. 小夜の歴史、東京弁/関西弁(3Ⅹ163-181)	5. 彩子が取っているクラス (2+2Ⅹ113-139)	5. 乗馬(4Ⅹ67-85)
6. 方言(3Ⅹ182-351)	6. 名前の呼び方(3+2Ⅹ140-150)	6. 啓二のミネソタ滞在期間(4) (86-98)
7. ニュースの関西弁(4) (352-441)	7. 八重と日本語学科の人達との 関係(4Ⅹ151-175)	7. 啓二の職業(4Ⅹ99-121)
8. 九州弁、四国弁(3) (442-467)	8. ESL オフィスと日本語学科 (2Ⅹ176-211)	8. 次郎のアメリカ滞在期間、専 攻(4Ⅹ122-143)
9. 関西の中での方言の違い (3Ⅹ468-521)	9. 日本語授業の説明(2+3) (212-270)	9. 次郎の日本の大学卒業後の歴 史(3Ⅹ144-171)
10. 和歌山弁(3Ⅹ522-538)	10. 今取っている授業(Phonetics) (5Ⅹ271-315)	10. 次郎の専攻(3Ⅹ172-194)
11. さよなら(1+5Ⅹ539-549)	11. Phonetics のクラスの経験 (2+2Ⅹ316-353)	11. 啓二の仕事、有給休暇(4) (195-218)
	12. 必須科目(2+3Ⅹ354-408)	12. 次郎の修論、現在の生活、将 来(1+5Ⅹ219-285)

	13. TA の資格(4+1)(409-428)	13. アメリカでの就職活動(4) (286-301)
	14. ESL クラス(4)(429-457)	14. 最近の日本、若者の犯罪(5) (302-324)
	15. 彩子の日本語教授法への興味 (3)(458-487)	15. 次郎の日本帰国(3)(325-328)
	16. 大学時代の日本語教育(2+1) (488-509)	16. 出身地(5)(329-373)
	17. 彩子の日本での中高英語教師 経験(3)(510-512)	17. 日本の夏の気候(4)(374-407)
	18. 年齢(4)(513-534)	18. ミネソタの嵐(3)(434-474)
	19. 八重の日本での職業(4) (535-660)	19. テーブルマイク(5)(475-487)
	20. 住所交換(2+1)(661-672)	20. M 大学は広い(4)(488-511)
	21. SLA クラス(4)(673-677)	21. ミネソタでの活動(4) (512-582)
	22. Dr. Q(2+4)(678-714)	22. 啓二のスポーツ 野球(3) (583-601)
	23. ミネソタの冬(3)(715-727)	23. 会話の終わり(3)(602-610)
	24. Dr. Q(2)(728-736)	
	25. 米国大学応募、M 大学選択 理由(2+3)(737-771)	
	26. ミネソタの印象(2)(772-778)	
	27. 出身地(4)(779-846)	
	28. 会話の終わり(0)(847-862)	

1. 自己紹介: 1 会話中の話題通し番号と話題タイトル
(5): 話題区分一致人数
(2+2): + の前の数字は、話題区分調査における被調査者の一致人数を示す。
+ の付いた後ろの数字は、決定した話題区分の近くの発話を話題区分として選び、かつ、同じような
話題タイトルを書いた被調査者の数を示す。
(1-23): 一話題中における始まりと終わりの発話番号

3.3 情報提供者と協力者

情報提供者と協力者が実際に、どのような発話をしているのかを会話 3 からの会話例(2)で見たい。話題18では、啓二(K)と次郎(J)は現在滞在しているM州に嵐が来ていて、夏なのに寒いという話をしている。466Kで啓二はM州に来てみてこんなに寒いとは思っていなかったという情報を提供しているので情報提供者とし、これに協力して467Jで次郎はあいづちをうっているので協力者とした。次に、468Jで次郎が自分の今の服装では寒すぎるのではないかという情報を提供しているので情報提供者とし、これに協力して469Kで笑っている啓二は協力者とした。そして、472Jで次郎があいづちをうっているがこれも情報提供者のままにした。さらに、話題19の475Jで次郎が啓二に対して、目の前にあるものは何であるかという情報要求の質問をしているので協力者とし、476Kでそれに対する答えとして「テーブルマイクで

す。」という情報を与えている啓二は情報提供者にした。このように、情報提供者と協力者の役割は絶えず入れ替わり、固定していない。

勧誘の会話を分析したザトラウスキー（1993:154）によると、話段が移行する際、勧誘者と被勧誘者の発話機能が入れ替わり、情報提供者と協力者の役割が交替されるとしている⁽⁶⁾。本研究で分析した会話資料は、ザトラウスキー（1991, 1993）の分析したような勧誘の会話とは異なるが、話題が変わるところで、情報提供者と協力者の役割が交替するものが見られた。会話例(2)の話題18の終わりで情報提供者であった次郎が話題19の始めで協力者として話題を開始している。また、話題19の終わりでは次郎が情報提供者であったが、話題20では啓二が情報提供者として話題を開始している。このように、情報提供者と協力者の区別をして分析することにより、話題としてのまとまりをより把握しやすいものとする手がかりにもなっているのである。

(2)啓二(K)=母語話者(20代後半男性), 次郎(Y)=母語話者(20代後半男性)

会話3

話題18: ミネソタの嵐⁽³⁾(434-474)

(...)

- 466K: こんなんだと思ひませ、
 思ひ//ませんでしたね。 情報提供者(情報提供) 話題中間部
- 467J: うーん。 協力者(共感の注目表示: あいづち)
- ☐ 468J: ちょっと、これでー、ね、短パン、
 ティーシャツ寒いなー 話題終了部
- とか//思ひながらー、{笑い} 情報提供者(情報提供)
- 469K: {笑い} 協力者(笑い)
- 470K: ええ。{笑い} 協力者(継続の注目表示: あいづち)
- 471- : (1.2)
- 472J: うーん。 情報提供者(同意の注目表示: あいづち)
- 473- : (2.8)
- 474K: {咳払い}

話題19: テーブルマイク⁽⁵⁾(475-487)

- 475J: うん、これ何だろ。 協力者(情報要求) 話題開始部
- 476K: テーブルマイクです。 情報提供者(情報提供)
- ☐ 477J: ふーん。 協力者(確認の注目表示: あいづち)
- 478K: ビデオ撮るからね。 情報提供者(情報提供) 話題中間部

479J : あーん .	協力者 (承認の注目表示 : あいづち)	
480- : (1.7)		
☐ 481J : へー , これだけじゃ ,		
不十分だなー . // {笑い}	情報提供者 (情報提供)	話題終了部
482K : {笑い}	協力者 (笑い)	
483J : ふうん .	情報提供者 (確認の注目表示 : あいづち)	
484J : そうか .	情報提供者 (確認の注目表示 : あいづち)	
485- : (2.1)		
486K : {咳払い}		
487J : あとー ,	情報提供者 (談話表示)	

話題 20: M 大学は広い(4) (488-511)

488K : すごい広いんですね , ここ ,		
// 大学 .	情報提供者 (同意要求)	話題開始部
489J : ふうん .	協力者 (確認の注目表示 : あいづち)	
490J : あ , そうだね .	協力者 (共感の注目表示 : あいづち)	
491K : うん .	情報提供者 (同意の注目表示 : あいづち)	
492J : セントポールの方も行った ?	協力者 (情報要求)	話題中間部

3.4 話題開始部と終了部

分析対象とした話題開始部と終了部の範囲は、以下の判断基準を基に筆者自身が決定した (Kato [Nakai] 1999). 以下のように、話題開始部の範囲を決定するには、協力者が話題を開始している場合に適用される基準 A と、情報提供者が話題を開始している場合に適用される基準 B がある。一方、話題終了部の範囲を決定するには、情報提供者の発話を基にした基準 C が適用される。

話題開始部	
基準 A	協力者 : 情報要求 (質問表現) 情報提供者 : 情報提供による応答
基準 B	情報提供者 : 情報提供 , 同意要求 協力者 : 応答 (あいづち , 前の発話の繰り返し , 評価表現等) または , 情報要求
話題終了部	
基準 C	情報提供者 : 最後の実質的な発話による情報提供 協力者 : 応答 (あいづち , 前の発話の繰り返し , 評価表現等) または , 情報要求

会話例(2)を再び見てみる。話題開始部の基準Aによると、話題19の475Jのように協力者(次郎)による情報要求で始まった場合、情報提供者の情報提供(476K)までが話題開始部になる(の上までの発話)。さらに、話題開始部の基準Bによると、話題20の488Kのように情報提供者(啓二)の同意要求で始まった場合、協力者のあいづち(489J)までが話題開始部になる。(ただし、基準A、Bのそれぞれの発話の間に、前の発話の繰り返し、重複発話が入る場合もある。)一方、話題終了部の基準Cによると、話題18、19における情報提供者による468Jと481Jの発話のように、次の話題区分からさかのぼって一番最後の実質的発話からが話題終了部となる(『から下の発話⁽⁷⁾)。

このようにして決定した59の話題開始部と62の話題終了部において⁽⁸⁾、どのような言語的要素が用いられているかについて以下、詳述する。

3.5 分析項目

【表A】に、分析した話題開始部及び終了部で用いられる20項目の言語的要素の項目と配列と分類をまとめた。この1から20までの配列は、「述部の四段階」(林1960)及び、「描叙段階」「判断段階」「提出段階」「表出段階」を含む「文の構造上の階層」(南1993)と「発話機能」(ザトラウスキー1993)を参考にして決めた。20項目の言語的要素は、1. 接続表現, 2. メタ言語表現, 3. 相互行為指標表現 “interactional markers” (Emmett 1996, 1998), 4. 応答表現, 5. 提題表現「は」、6. 格助詞の省略, 7. 指示表現, 8. 評価表現, 9. 「のだ」文, 10. 普通体, 11. 質問表現, 12. 接続助詞, 13. 終助詞, 14. 語尾母音の引き延ばし, 15. 倒置表現, 16. あいづち, 17. 重複発話, 18. 反復発話, 19. 自己修復発話, 20. 共同発話, からなる⁽⁹⁾。また、これらの20項目の要素は、その特徴ごとに5つの分類に分けた。要素1から3は文頭要素, 要素4から7は述語的部分以外の要素, 要素8から10は述語的部分の要素, 要素11から15は文末要素, 要素16から20は相互行為的要素⁽¹⁰⁾とした。

さらに、これら20項目の言語的要素に関連する先行研究を【表A】の中の各要素の右側にまとめた⁽¹¹⁾。各先行研究の右に示してある「開始部」「終了部」「開始部/終了部」は、その研究で分析されている言語的要素が話題のどの部分で用いられていたかを表している。例えば、接続表現を分析している

Reichman (1978) では、接続表現が話題開始部で用いられる傾向が見られたということである。

【表A】母語話者の情報提供者と協力者が話題開始部及び話題終了部で用いた言語的要素

言語的要素の5段階の分類	20項目の言語的要素	先行研究	言語的要素が用いられていた部分	本研究							
				話題開始部				話題終了部			
				情報提供者		協力者		情報提供者		協力者	
使用数	使用比率	使用数	使用比率	使用数	使用比率	使用数	使用比率				
文頭要素	1. 接続表現	Reichman (1978) 市川 (1978) Maynard (1989) 佐久間 (1990, 1992) ザトラウスキー (1991,1993,2002) ザトラウスキー (1998) Yamada (1992) 佐久間・鈴木(1993) 鈴木 (1994, 1995) Karatsu (1995)	開始部 開始部 開始部/終了部 開始部 開始部 開始部/終了部 開始部 開始部/終了部 開始部/終了部	17	6.2%	6	2.9%	14	3.9%	3	1.4%
	2. メタ言語表現	杉戸 (1983) Maynard (1989) ザトラウスキー (1991, 1993) Yamada (1992) Gelyukens (1993)	開始部/終了部 開始部/終了部 開始部/終了部 開始部 開始部	1	0.4%	1	0.5%	3	0.8%	2	0.9%
	3. 相互行為指標表現	Yamada (1992) 鈴木 (1994, 1995) Emmett (1996) ザトラウスキー (1998)	開始部 開始部 開始部 開始部/終了部	54	19.6%	15	7.3%	30	8.3%	16	7.3%
述語的部分以外の要素	4. 応答表現	鈴木 (1994, 1995)	終了部	12	4.4%	0	0.0%	4	1.1%	7	3.2%
	5. 提題表現「は」	鈴木 (1994, 1995) ザトラウスキー (1998)	開始部 開始部	19	6.9%	12	5.9%	15	4.1%	2	0.9%
	6. 格助詞の省略			10	3.6%	5	2.4%	5	1.4%	3	1.4%
	7. 指示表現	鈴木 (1994, 1995) ザトラウスキー (1998)	開始部/終了部 開始部/終了部	9	3.3%	17	8.3%	12	3.3%	5	2.3%
述語的部分の要素	8. 評価表現	Goodwin and Goodwin (1992) Maynard (1989)	終了部 開始部/終了部	10	3.6%	1	0.5%	23	6.4%	7	3.2%
	9. 「のだ」文			22	8.0%	14	6.8%	13	3.6%	4	1.8%
	10. 普通体	Ikuta (1983)	終了部	18	6.5%	16	7.8%	50	13.8%	20	9.1%
文末要素	11. 質問表現	Long (1981) Gelyukens (1993) 鈴木 (1994, 1995) Sasaki (1996) 佐々木 (1997, 1998) ザトラウスキー (2002)	開始部 開始部 開始部 開始部 開始部 開始部	1	0.4%	34	16.6%	0	0.0%	7	3.2%
	12. 接続助詞	Jorden with Noda (1987)	開始部	11	4.0%	1	0.5%	20	5.5%	0	0.0%
	13. 終助詞			24	8.7%	20	9.8%	30	8.3%	13	5.9%
	14. 語尾母音引延	Yamada (1992)	終了部	17	6.2%	13	6.3%	46	12.7%	43	19.6%
	15. 倒置表現	Gelyukens (1993) ザトラウスキー (2002)	開始部 終了部	8	2.9%	5	2.4%	9	2.5%	0	0.0%
	相互行為的要素	16. あいづち	Maynard (1989) ザトラウスキー (1991,1993,1998,2002) 今石 (1992) 鈴木 (1994, 1995) Chafe (1987)	開始部/終了部 終了部 終了部 終了部 終了部	9	3.3%	21	10.2%	43	11.9%	54
17. 重複発話				16	5.8%	18	8.8%	31	8.6%	24	11.0%
18. 反復発話				5	1.8%	2	1.0%	6	1.7%	3	1.4%
19. 自己修復発話		Goodwin (1981)	開始部	12	4.4%	4	2.0%	6	1.7%	2	0.9%
20. 共同発話				0	0.0%	0	0.0%	2	0.6%	4	1.8%
合計				275	100%	205	100%	362	100%	219	100%

5% > ハイライト
10% > 太字ハイライト

次に，【表 A】の右側半分に，本研究で分析した話題開始部及び終了部における情報提供者と協力者の言語的要素の使用数と使用比率¹²⁾をそれぞれまとめた．5%以上用いられている要素にハイライトを，10%以上用いられている要素に太字ハイライトを付けた．以下，これら20項目の言語的要素が情報提供者と協力者によってどのように使い分けられ，どのように話題開始部と終了部を構成しているのかをしてみる．それにより，話題開始部と終了部の特徴は何か，また，情報提供者と協力者の役割の相違点，話題の参加の仕方を探りたい．なお，紙面の都合により，20項目のうち使用率が高く（5%以上），特に際立った特徴を持つ要素のみを中心に選び出して扱うことにする¹³⁾．

4. 話題開始部

【表 B】に，話題開始部で主に用いられていた要素をまとめた．話題開始部では，情報提供者は，主に，相互行為指標表現，終助詞，「のだ」文等を，協力者は，質問表現，あいづち，終助詞等を多く用いていた．

【表 B】 話題開始部で主に用いられていた要素

情報提供者：相互行為指標表現（19.6%），終助詞（8.7%），「のだ」文（8.0%），提題表現「は」（6.9%），普通体（6.5%），接続表現（6.2%），語尾母音の引き延ばし（6.2%），重複発話（5.8%）

協力者：質問表現（16.6%），あいづち（10.2%），終助詞（9.8%），重複発話（8.8%），指示表現（8.3%），普通体（7.8%），相互行為指標表現（7.3%），「のだ」文（6.8%），語尾母音の引き延ばし（6.3%），提題表現「は」（5.9%）

会話2からの会話例³⁾の「話題3：彩子のこれまでの歴史」は，情報提供者の彩子（A）が34A「私，英語の先生だった，」35A「教員だったんですよー。」で始めている．35A「教員だったんですよー。」では，「のだ」文，終助詞「よー」，母音の引き延ばし¹⁴⁾が用いられている．そして，この発話を，協力者の八重（Y）が36Yで「あーそうですか。」というあいづち¹⁵⁾で受けている．さらに，会話2からの会話例⁴⁾の「話題13：TAの資格」では，情報提供者の彩子（A）が日本語学科のティーチングアシスタント応募について情報

を提供して話題を開始している。彩子は、409A で相互行為指標表現¹⁶「あの一」、メタ言語表現「なんていうんでしょう」、「のだ」文、語尾母音を引き延ばされた接続助詞「けどー」を用いている。それに対して、協力者の八重(Y)は410Yで母音を引き延ばされたあいづち「うーん。」を用いている。

- (3)彩子(A)=母語話者(情報提供者,20代後半女性),
 八重(Y)=母語話者(協力者,30代前半女性) 会話2
 話題3:彩子のこれまでの歴史⁽³⁾(34-57)
 34A:私,英語の先生だった,
 35A:教員だったんですよ。{笑い}
 「のだ」文,終助詞「よ」,母音の引き延ばし
 36Y:あーそうですか。 あいづち

- (4)彩子(A)=母語話者(情報提供者,20代後半女性),
 八重(Y)=母語話者(協力者,30代前半女性) 会話2
 話題13:TAの資格⁽⁵⁾(409-428)
 409A:結構一,あの一,なんていうんでしょう, 相互行為指標表現
 TAにアプライされる方も多たって メタ言語表現,「のだ」文
 聞い//たんですけどー, 接続助詞「けど」,母音の引き延ばし
 410Y: うーん。 母音の引き延ばし,あいづち

会話2からの会話例⁽⁵⁾の「話題2:身分」は、協力者の彩子(A)が12A「こちらの学生さんでいらっしゃるんですか?」で始めている。この発話では、「こ系」の指示表現「こちら」、「のだ」文、質問表現、終助詞「か」⁽¹⁷⁾が用いられている。そして、この発話に対して、情報提供者の八重(Y)が13Yで「あっ、そうです。」という応答表現で答えている。

- (5)彩子(A)=母語話者(協力者,20代後半女性),
 八重(Y)=母語話者(情報提供者,30代前半女性) 会話2
 話題2:身分⁽³⁾(12-33)
 12A:こちらの学生さんで 指示表現「こ系」,「のだ」文,
 いらっしゃるんですか? 質問表現,終助詞「か」
 13Y: あっ,そうです。 応答表現

4.1. 情報提供者が話題開始部で用いた言語的要素

情報提供者は、話題開始部で終助詞を8.7%用いる傾向が見られたが、それらの終助詞にはどのような種類のもがあり、他のどのような要素と共に用いられているかについて分析したものを【表1-1】と【表1-2】にまとめた¹⁸⁾。【表1-1】の終助詞の種類は、情報提供の終助詞「よ(-)」、それに次いで、同意・確認要求の「ね?¹⁹⁾」が多く用いられていた。また、【表1-2】の終助詞が用いられていた発話で共に用いられていた別の要素では、「のだ」文と語尾母音の引き延ばしの使用比率が多く、終助詞が用いられていた全発話のそれぞれ50%と45%という割合を占めていた。つまり、話題開始部で情報提供者が終助詞を用いた場合、その発話に半分ぐらゐの割合で「のだ」文と語尾母音の引き延ばしを用いる傾向が見られたということである。

【表1-1】終助詞の種類	使用数	使用比率(%)	使用例
よ(-)	8	40.0%	私、すごく方言好きなんですよ。
ね?	5	25.0%	あの一、岡崎なんですけどね?
よね(-)?	3	15.0%	ちょっと寒いよね? 今日。
ねー	2	10.0%	なんか、お若く見えますけどねー。
かな(-)	2	10.0%	今、ここ来て一、3、3年目かなー。
終助詞がある発話の総数	20	100%	
【表1-2】終助詞が用いられていた発話で共に用いられていた別の要素	使用数	使用比率(%)	使用例
「のだ」文	10	50.0%	あ、中高だったんですよー。
語尾母音の引き延ばし	9	45.0%	なんか、お若く見えますけどねー。
終助詞がある発話の総数	20		

4.2. 協力者が話題開始部で用いた言語的要素

協力者は、話題開始部であいづちを10.2%用いる傾向が見られたが、それらのあいづちにはどのような種類のもがあり、他のどのような要素と共に用いられているかについて分析したものを【表2-1】と【表2-2】にまとめた。【表2-1】のあいづちの種類は、「うん..」「うーん..」「あ(-)そうですか(-)。」等が多く用いられていた。そして、【表2-2】のあいづちと共に用いられていた別の要素では、「うーん..」等の母音の引き延ばしが多く、用いられていた全体のあいづちの47.6%を占めていた。また、協力者のあいづちが、情報提供者の発話に重なる形(重複発話)で用いられていたものが全体の38.1%

あった。つまり、あいづちを用いる際には、協力者がそれに先行する情報提供者の発話に重なる形で、母音を延ばしたあいづちを用いる傾向が見られたということである。

【表 2 - 1】あいづちの種類	使用数	使用比率 (%)	あいづちの種類	使用数	使用比率 (%)
うん .	5	23.8%	えーえー .	1	4.8%
うーん .	5	23.8%	ふーん .	1	4.8%
あ(ー) そうですね(ー) .	4	19.0%	ねー .	1	4.8%
はい .	2	9.5%	あほんとに? .	1	4.8%
うーん , うん .	1	4.8%			
あいづちの総数 .	21	100%			
【表 2 - 2】あいづちと共に用いられていた別の要素	使用数	使用比率 (%)	使用例		
母音の引き延ばし	10	47.6%	うーん . あーそうですねー . えーえー . ふーん .		
重複発話	8	38.1%			
あいづちの総数	21				

また、【表 3 - 1】にまとめたように、協力者は、質問表現を用いる際、「こ」系と「ど」系の指示表現、「何」という質問表現、「のだ」文、倒置表現を用いることがあり、そのうち、指示表現と「のだ」文の割合が高いことが分かる。

【表 3 - 1】質問表現で用いられていた要素	使用数	使用比率 (%)	使用例
指示表現(こ系)	9	26.5%	今、ここ、ここに来て何年ぐらい？ もうずっとこんくらい、の寒さ？
指示表現(ど系)	7	20.6%	XXさんは、どんな感じなんですか？
何	3	8.8%	あ、じゃ、何のクラス取ってるんですか？
「のだ」文	11	32.4%	関西の方って、ニュースも関西弁でやるんですか？
倒置表現	4	11.8%	どちらですか？ 愛知県は . どちらですか？ 出身は .
質問表現の総数	34		

5. 話題終了部

【表 C】に示したように、話題終了部では、情報提供者は、普通体、語尾母音の引き延ばし、あいづちの他、評価表現等を多く用いるのに対し、協力者は、あいづち、語尾母音の引き延ばし、重複発話等を多く用いる他、評価表現等も少し用いるという傾向が見られた。

【表C】 話題終了部で主に用いられていた要素

情報提供者：普通体（13.8%），語尾母音の引き延ばし（12.7%），あいづち（11.9%），重複発話（8.6%），相互行為指標表現（8.3%），終助詞（8.3%），評価表現（6.4%），接続表現（5.5%）

協力者：あいづち（24.7%），語尾母音の引き延ばし（19.6%），重複発話（11.0%），普通体（9.1%），相互行為指標表現（7.3%），終助詞（5.9%）…（略）…評価表現（3.2%）

会話3からの会話例(6)は、「話題19：テーブルマイク」の終了部，及び、「話題20：M大学は広い」の開始部から成る。481Jで情報提供者の次郎（J）が会話録音用のテーブルマイクを指し，自分達の貴重な会話を録音するにはもっと多くのマイクが必要だという意味で，冗談混じりに「へー，これだけじゃ，不十分だなー。」と発話している。この発話では，「へー」というあいづち，「こ系」の指示表現「これ」，「不十分だ」という普通体形容動詞を用いた評価表現，語尾母音引き延ばされた終助詞「なー」が用いられている。その後，協力者の啓二（K）が482Kで481Jの笑いに重なる形で笑い，そして，情報提供者の次郎が483Jと484Jで母音を引き延ばしたあいづち「ふーん。」と「そうか。」というあいづちを発話している。次いで，485-の2.1秒の沈黙の後，啓二が486Kで咳払いをし，話題19が徐々に終了している。そして，488Kで啓二が情報提供者になり，「すごい広いんですね？ ここ，//大学。」という発話を用いて話題20を開始している。

(6)次郎（J）＝母語話者（情報提供者，20代後半男性），

啓二（K）＝母語話者（協力者，20代後半男性）

会話3

話題19：テーブルマイク(5)（475-487）

(…)

♯ 481J：へー，これだけじゃ，不十分だなー。//{笑い}

あいづち，指示表現「こ系」，評価表現（形容動詞），

普通体，終助詞「な」，語尾母音の引き延ばし

482K： {笑い}

483J：ふーん。 語尾母音の引き延ばし，あいづち

484J：そうか。 あいづち

485-：（2.1）

486K: { 咳払い }

487J: あとー ,

接続表現

啓二(K)= 母語話者(情報提供者), 次郎(J)= 母語話者(協力者)

話題20: M 大学は広い(4) (488-511)

488K: すごい広いんですね?

指示表現「こそ」、評価表現(形容詞),

ここ, //大学.

「のだ」文, 終助詞「ね?」, 倒置表現

⌋ 489J: ふーん .

語尾母音の引き延ばし, あいづち

会話2からの会話例(7)は, 「話題19: 八重の日本での職業」の小話題「成績」の終了部及び, 「話題20: 住所交換」の開始部から成る. 話題19では, アメリカ留学中の日本人学生の彩子(A)と八重(Y)がこれから共に受ける難しい授業について話していた. そして, その話題の終了部で, 情報提供者の彩子(A)が, アメリカ人の院生で同じ授業を受ける友人がいるので, 分からないことがあればその人に聞いて助けてもらえるということを言っている. それを受けて, 659Yで協力者の八重は, 「あーいいなー .」と, 普通体の形容詞を用いた評価表現を用い, 語尾母音を引き延ばした終助詞「なー」を用いて, 話題に対する共感を表している. そして, 660Aで彩子が母音を引き延ばしたあいづち「うーん .」を用い, 話題を終了させている.

(7)彩子(A)= 母語話者(情報提供者, 20代後半女性),

八重(Y)= 母語話者(協力者, 30代前半女性)

会話2

話題19: 八重の日本での職業(4) (535-660) 成績(2) (613-660)

(...)

⌋ 656A: ちょっと, 分からない時があったら, { 笑い }

657Y: { 笑い }

658A: 助けてもらおうかなと思って .

659Y: あーいいなー . 評価表現(形容詞), 普通体, 終助詞「な」, 語尾母音引延

660A: うーん .

語尾母音の引き延ばし, あいづち

話題20: 住所交換(3) (661-672)

661Y: 呼んで下さい, 私も .

⌋ 662A: ねー .

5.1. 情報提供者が話題終了部で用いた言語的要素

会話例(6)で見たような、情報提供者によって話題終了部で用いられていた評価表現にはどのような種類のものがあり、他のどのような要素と共に用いられているかについて分析したものを【表4-1】と【表4-2】にまとめた。【表4-1】の評価表現の種類は、形容詞が43.5%と最も多く、次いで、「違う」「興味がある」等の動詞、「大変だ」等の形容動詞も見られた。また、【表4-2】の評価表現の発話で共に用いられていた別の要素としては、普通体の評価表現が全体の43.5%とほぼ半数くらいの割合を占めていた。また、「のだ文」(17.4%)、終助詞(34.8%)、語尾母音の引き延ばし(26.4%)、倒置表現(21.7%)が評価表現と共に用いられていた。

【表4-1】評価表現の種類	使用数	使用比率(%)	使用例
形容詞	10	43.5%	すごい人ですよ？ / 寒いですけど。
形容動詞	5	21.7%	不思議ですねー。
動詞	7	30.4%	なんかちょっと、違うぞって。 やっぱり、興味があるし。
副詞	1	4.3%	なんか、ほのぼのとしていいな、みた いな。
評価表現の総数	23	100%	
【表4-2】評価表現の発話で共に用いられていた別の要素	使用数	使用比率(%)	使用例
「のだ」文	4	17.4%	もう、ほんと、目標高いんですよ
普通体	10	43.5%	話がはずんじゃったー。 長かった、ほんとにー。
終助詞 [ね?(3)ねー。 (1)よ(2)よね?(1) なー(1)]	8	34.8%	不思議ですねー。 おもしろいですよ、でも。
語尾母音の引き延ばし	6	26.4%	もう、一番いい時期に来たからー、
倒置表現	5	21.7%	大丈夫じゃないですか？ きっと。
評価表現の総数	23		

5.2. 協力者が話題終了部で用いた言語的要素

協力者もわずかではあるが(3.2%)、終了部で評価表現を用いていたので、どのような種類のものがあり、他のどのような要素と共に用いられているかについて分析したものを【表5-1】と【表5-2】にまとめた。【表5-1】の評価表現の種類で最も多かったのは、形容詞と形容動詞だった。また、【表5-2】の評価表現の発話で共に用いられていた別の要素では、「のだ」文は1つ

もなく、「あーいいなー」のように、普通体の評価表現が85.7%と高い比率で見られた。

また、【表6-1】にまとめたように、あいづちの種類については、使用比率が多いもの順に並べてみた。ここから分かるように、協力者は終了部で「うーん」「あー」「ええ」「そうか(ー)」等を多く用いることが観察された。ま

【表5-1】評価表現の種類	使用数	使用比率(%)	使用例
形容詞	3	42.9%	横浜いいよね？
形容動詞	3	42.9%	大変だねー。
動詞	0	0%	
副詞	1	14.3%	あーようやく。
評価表現の総数	7	100%	
【表5-2】評価表現の発話と共に用いられていた別の要素	使用数	使用比率(%)	使用例
「のだ」文	0	0%	
普通体	6	85.7%	あーいいなー。
終助詞[ねー。(2)なー。(1)よねー。(1)よなー。(1)]	5	71.4%	今日は朝から大変ですねー。
語尾母音の引き延ばし	2	28.6%	え、大変だよなー。
倒置表現	0	0%	
評価表現の総数	7		

【表6-1】あいづちの種類	使用数	使用比率(%)	あいづちの種類	使用数	使用比率(%)
うーん。	11	20.4%	あー、はい、はい。	1	1.9%
あー。	6	11.1%	あーあーあー。	1	1.9%
ええ。	4	7.4%	あーはい。	1	1.9%
そうか(ー)。	4	7.4%	あーん。	1	1.9%
あそうですか(ー)。	3	5.6%	あっ。	1	1.9%
ふーん。	3	5.6%	うーん、うーん。	1	1.9%
あ(ー)そうなんですか(ー)。	2	3.7%	え、え、え。	1	1.9%
あ、ほんとに(ー)。	2	3.7%	ええ、ええ。	1	1.9%
うん。	2	3.7%	ねー、うん。	1	1.9%
えー。	2	3.7%	はーい。	1	1.9%
そうですね(ー)。	2	3.7%	へー。	1	1.9%
はい。	2	3.7%			
あいづちの総数	54	100%			
【表6-2】あいづちと共に用いられていた別の要素	使用数	使用比率(%)	使用例		
語尾母音の引き延ばし	37	68.5%	うーん。/あー。/そうかー。		
重複発話	13	24.1%			
あいづちの総数	54				

た，【表 6 - 2】のあいづちと共に用いられていた別の要素は，あいづちの 7 割近くが「うん .」、「あー .」等のように母音の引き延ばしを伴い，24.1%が会話相手である情報提供者の発話に重複する形で用いられる傾向があった .

6 . 分析結果のまとめと考察

初対面の日本語母語話者同士による会話 1 , 2 , 3 の分析で得られた結果を以下まとめ，それについて考察する .

話題開始部

話題開始部において情報提供者は，相互行為指標表現，情報提供の終助詞「よ」，同意・確認要求の終助詞「ね」「よね」，及び「のだ文」，語尾母音の引き延ばし等を用いる傾向が見られた . これらの言語的要素を話題開始部で用いることにより，情報提供者は，協力者の注意を引き，新しい情報を示し，同意を得，協力者を話題に引き込むために積極的に働きかけ，それと同時に自らの話題への参加姿勢をより強く示しているのではないかと考えられる .

さらに，協力者は，情報提供者の情報提供を受け，「うん .」，母音を引き延ばした「うん .」，「あーそうですかー .」等のあいづちを用い，話題に参加する姿勢を示し，これらのあいづちをしばしば情報提供者の発話に重複して用いる傾向が見られた . また，協力者が質問表現で話題を引き出す際，しばしば「のだ文」が用いられ，指示表現の「こ系」や「ど系」もよく用いられるという傾向も見られた⁽²⁾ . Jordan with Noda (1987:242) は，共有した情報という点から「のだ」文の重要性を指摘し，「のだ」文は，適切に用いられると，親近感，共感，理解，暖かさを生み出しうると述べている . それに対して，Noda (1981:87) は，もし日本語学習者が共有知識があるにもかかわらず「のだ」文を用いない場合，そのつもりはなくても，その話題に対して興味がないように映り，「距離をおいた，違和感のある，よそよそしい，無関心な」(Noda 1981:87) 印象を与えてしまう恐れがあると述べている . 会話例(5)では，会話撮影した場所が大学であったために A が Y に対して「こちら」つまり「この大学」の学生かどうかを「のだ」文を用いて聞いている . このように，話題の前提になっている情報，または，前の話題で上がった事柄等について質問する場合

に、「のだ」文を用いることにより、話題と話題のつながりをより密に示し、会話相手への親近感を表して、話題への参加の度合いをより高めると考えられる。

話題終了部

話題終了部では、情報提供者及び協力者は、評価表現を用いて話題を終了させる際、形容詞、形容動詞、動詞及び「ね(ー)」「よね」等の終助詞を用いる傾向が見られた。C. Goodwin & M. Goodwin (1992:171)によると、評価表現を用いることにより、その話題への関心度、参加の度合いを高め、話題の最高の盛り上がり、クライマックスの頂点を示し、話題の終結を予告させうることである。したがって、情報提供者は、「のだ」文、普通体、終助詞、語尾母音の引き延ばし、倒置表現を用いた評価表現を終了部で用いることにより、最後のまとめとしてのその話題に対する自分の総合的な姿勢・感情(例えば、喜び、苦しみ、共感、驚き、うらやましさ、賛成、反対等)を強く表し、話題の頂点を作り上げているのではないかと考えられる。

会話例(7)の八重は、初対面の彩子と話しているので、会話全体を通して基本的に「です/ます」体を用いているのだが、話題終了部で用いる評価表現では、しばしば普通体を用いることがあった。Ikuta (1983:43)によると、日本語は共感を表す評価表現を社会的に好む傾向があり、互いにあまり親しくなくとも、普通体を用いることによって、「強い同意、先行発話に対する積極的な評価、話し相手への賞賛」(和訳筆者)等の相互共感を示すという。したがって、終了部で協力者は、普通体の評価表現を用いて、話し相手への共感を示し、さらに、終助詞、語尾母音の引き延ばしを用いることによって、自分の感情を示し、話題への積極的な参加姿勢を示しているのではないかと考えられる。

最後に、協力者が用いたあいづちについてであるが、開始部では協力者のあいづちの母音が引き延ばされる割合が47.6%であったが、終了部では母音の引き延ばしが68.5%とさらに多かった。反対に、重複して用いられたあいづちは、開始部で38.1%、終了部で24.1%と、終了部の方がやや少なかった。このような結果が出たのは、終了部では、開始部よりも話題への興味関心が下が

り、発話のやりとりのテンポが落ちるので、あいづちも母音が引き延ばされてゆっくり発話され、話者同士の発話の間隔も広がり、発話が重複することが少なくなるからではないかと考えられる⁽²¹⁾。

7. 最後に

以上、初対面の母語話者同士による会話資料の分析を基に、話題開始部及び終了部における言語的要素の用いられ方の特徴を述べた。本研究で得られた結果は、会話資料の少なさに加え、ほとんどがアメリカで暮らす初対面の20-30代の日本語母語話者という制約があるため、一般化するには限界があると言える。しかし、これも日本語母語話者がどのように話題を開始し、終了しているのかという一つのケーススタディーとしては価値があるものだと思いたい。そして、ここで得られた分析結果を日本語教育の現場にも応用できれば、日本語学習者の会話へのより積極的な参加態度を示す談話能力の形成の助けにもなるのではないと思われる。この談話能力の形成によって、学習者がよそよそしさを感じさせずに母語話者より良い人間関係を作っていけるようになればと願う。

もちろん、本研究で得られた結果をそのまま学習者に教え込ませるのには問題があると思われる。しかし、授業で明示的／非明示的にでも学習者に初対面の会話の特徴について気付かせていくことは必要であると言える。つまり、話題開始部及び終了部で用いられる言語的要素の傾向・特徴を知識として与え、意識化、自覚化させ、それをスタートとして、後は、学習者の現実コミュニケーション場面での観察・体験・取捨選択を通して体得していくのが近道なのではないと思われる。実際、教室内では、学習者同士にある一定の時間自由に会話させ、話題の進行を自ら務めさせたり、母語話者同士、または、母語話者と非母語話者の会話を録画したビデオ教材を見せる等して、会話への積極的参加態度が示せるような話題の始め方・終わり方について考えさせる機会を与えてみるのは有効であると考えられる。また、教室外でも、初対面の母語話者と話し、相手がどのように話題を開始し、終了しているのかを観察させ、それについて教室で話し合い、実際にそれを使ってみるというような機会を与えてみるのもよいと思われる⁽²²⁾。

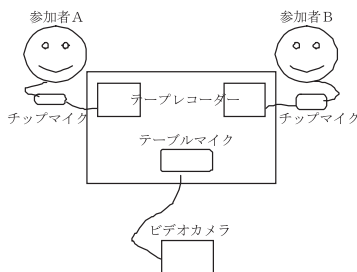
今後、母語話者と非母語話者の接触場면을扱ったデータを基に、話題開始部、中間部、終了部といった話題全体の展開の仕方の分析を課題として進めて行きたいと思う。

謝辞

本稿は、1999年5月提出の修士論文、“Topic shifting devices used in Japanese native/ native and native/ non-native conversations”の一部を和訳改訂し、第7回社会言語学会研究発表大会で発表したものを加筆・修正したものである。執筆に当たり、米国ミネソタ大学のポリリー・ザトラウスキー準教授、及び、早稲田大学の小宮千鶴子教授に御指導頂いた。ここで感謝の意を表したい。さらに、本研究で使用した会話の参加者、話題区分調査の被調査者の方々にも感謝の意を表したい。

注

- (1) 詳しい発話機能の定義等は、ザトラウスキー（1993）参照。
- (2) 会話の録音・録画に用いた機材と参加者が座っていた位置は以下の通りである。



- (3) 文字化表記は、ザトラウスキー（1993）を参考に以下のような方法で行った。

(58-93)	1話題中における始まりと終わりの発話番号
(4)	話題区分調査における被調査者の一致人数
(2+2)	+の前の数字は、話題区分調査における被調査者の一致人数を示す。+の付いた後ろの数字は、決定した話題区分の近くの発話を話題区分として選び、かつ、同じような話題タイトルを書いた被調査者の数を示す。
(...)	発話の省略
	話題開始部が終わる区切れ目を示す。
『	話題終了部が始まる区切れ目を示す。
.	下降のイントネーションで文が終了することを示す。
,	ごく短い沈黙、あるいはさらに文が続く可能性がある場合の「名詞句、副詞、従属節」等の後に記す。
?	疑問符ではなく、上昇のイントネーションを示す。
「	「」の前の音節が長く延ばされていることを示す。
//	同時発話
(1.5)	一秒以上の沈黙秒数（ストップウォッチで測ったもの）
{}	笑い等の非言語行動

- (4) 被調査者についての情報は、Kato [Nakai] (1999) 参照。
- (5) 被調査者には「話題（トピック、内容のまとめり）」と説明した。
- (6) 例えば、「勧誘の話段」から「勧誘応答の話段」へと移る時、勧誘者の情報提供から被勧誘者の情報提供に変わり、情報提供者が勧誘者から被勧誘者へと移るのである。このことにより、それぞれの話段の話題が「勧誘」から「応答」へと変わるのだという。
- (7) ただし、最後の実質的発話がくり返されている場合は、繰り返されている元の発話から終了部とした。また、最後の実質的発話の前にその修飾句・修飾節、従属節がある時は、修飾句・修飾節の場合はそのすべてを、従属節の場合は最後の従属節だけを加えて、終了部の始まりとした。
- (8) 各会話の最後の話題は、話題開始部のない話題終了部のみとして分析したので、話題開始部と終了部の各合計は異なる。
- (9) 詳しい用語規定は、Kato [Nakai] (1999) 参照。
- (10) 相互行為的要素とは、発話のどの位置にも現れ、参加者同士の相互行為に基づいて用いられる言語的要素のことを指す。ここに含まれる要素は、他の要素と言語使用の面で性質が異なるが、話題開始部と終了部での使用が認められたので、本研究では、他の要素と共に分析対象とした。
- (11) 【表A】にまとめた先行研究は20項目の言語的要素と関連のあるものであるが、それぞれの研究で用いられている要素を指す用語は本研究で用いている用語と同じとは限らない。また、日本語と英語の言語的文化的違いはあるものの、共通点もあるので、英語会話を扱った先行研究も【表A】に加えておいた。紙面の都合により、【表A】に載せてある先行研究のすべてを参考文献に入れることはできなかった。完全な参考文献リストは Kato [Nakai] (1999), Nakai (2002) 参照。
- (12) 言語的要素の使用比率は、話題開始部及び終了部において情報提供者及び協力者によって用いられたそれぞれの言語的要素の数を、全部の言語的要素の用いられた数の合計で割ったものである。例えば、情報提供者の役割をする母語話者は、話題開始部において全部で275個の言語的要素を使用しており、その内、17個を接続表現に用いている。よって、接続表現の使用比率は、17/275、つまり、6.2%となるわけである。なお、話題開始部/終了部では、複数の同じ言語的要素が繰り返し用いられることもあるので、その場合もそれらすべてを合計し、使用数に含めた。
- (13) 詳しくは、Kato [Nakai] (1999) 参照。
- (14) 母音の引き伸ばしは、1) 語尾母音（例：行ったけどー。）、2) あいづちの母音（例：うーん、へー。）が引き伸ばされて発音されているものを指す。なお、母音の引き伸ばしの有無は筆者の耳で判断した。
- (15) 杉戸（1987:88）は以下のようにあいづち的な発話と実質的な発話を区別している。
1. あいづち的な発話：「ハー」「アー」「ウン」「アーソーデスカ」「サヨーデゴザイマスカ」「エーソーデスネー」などの応答詞を中心にする発話。先行する発話をそのままくりかえす、オーム返しや単純な聞きかえしの発話。「エーッ!」「マア」「ホー」などの感動詞だけの発話。笑い声。実質的な内容を積極的に表現する言語形式（たんなるくり返し以外の、名詞、動詞など）を含まず、また判断・要求・質問など聞き手に積極的なはたらきかけもしないような発話。

2. 実質的な発話：あいづち的な発話以外の種類の発話．なんらかの実質的な内容を表す言語形式を含み，判断・説明・質問・回答・要求など事実の叙述や聞き手へのはたらきかけをする発話．

(杉戸1987:88)

本研究では，杉戸(1987:88)の上記のような区別を採用する．しかし，ザトラウスキー(1993:84)が，オーム返しや単純な聞きかえしの発話の認定には先行発話との距離・イントネーション等を考慮しなければならないと指摘するように，その認定が難しい．そこで，あいづちに関しては，応答詞と感動詞をあいづちとして含めるが，オーム返しや単純な聞きかえしの発話と笑い声はあいづちとして含めず，それぞれ繰り返し，質問表現，笑いとして扱った．

- (16) 相互行為指標表現“interactional marker”とは「あの」「えっと」などの言語的要素を指す．Emmett (1996, 1998)によると，これらは単に沈黙を埋めるのではなく，会話上の相互行為に関連して使われ，会話開始部で用いられる場合，慎重に発話を構成したり，適切な言葉を模索したりするときに用いられるという．なお，エメット(2001)では“interactional marker”の和訳を「インターアクショナルマーカー」としているが，本稿では「相互行為指標表現」と和訳して用いている．
- (17) 質問表現とは情報要求のことであり，同意・確認要求とは区別され，質問表現と終助詞「か」は別々に用いられる場合があるので，いずれの場合も別々に数えた．例えば，情報要求「やってみますか？」の場合は，質問表現と終助詞「か」が同時に用いられるが，情報要求「やってみます？」は質問表現のみであり，同意要求「やってみようじゃないですか。」と確認「やってみたのか。」は終助詞「か」のみである．
- (18) 【表1-1】は，【表A】にまとめた情報提供者が開始部で用いた24個の終助詞を取り出して，それぞれがどのような形をとっているかを分析したものである．【表1-1】では「よね」「かな」などの2つ続いている終助詞を一つとして数えたので，終助詞の総数が20個になっているが，【表A】ではこれらを2個として数えたので，総数が24個となっている．使用比率の求め方は，それぞれの終助詞の使用数を終助詞の使用数の総数(終助詞がある発話の総数20)，で割ったものである．例えば，終助詞「よ()」の使用比率は，8/20で40%となる．したがって，それぞれの終助詞の使用比率を合計すると100%になる．これに対して，【表1-2】での使用比率の求め方は，それぞれの言語的要素の使用数を終助詞の使用数の総数(20)で割ったものである．例えば，「のだ」文の使用比率は，10/20で50%となる．したがって，表中のそれぞれの言語的要素(「のだ」文と語尾母音の引き延ばし)の使用比率はそれぞれ独立して計算しており，その合計は100%にはならない．以下，【表2-1】～【表6-2】までにまとめた使用比率も上記のような計算方法で行った．
- (19) Jordan with Noda (1987:33, 42-43) は，「ね？」と「ねー」を区別し，上昇イントネーションの「ね？」は確認(例：知っていますね?)を，下降イントネーションの「ねー」は同意(例：あまり面白くありませんね。)を，「ねー」は同意(例：つまらないですねー。)と内省的婉曲表現(例：できませんか。 できませんねえ。)を表すと述べている．
- (20) 話題開始部で用いられる質問表現の詳しい分析については，中井(2002, 2003a)参照．

- (21) 開始部と終了部であいづちのイントネーションも変わってくると言われている。今石(1992)は、参加者があいづちのイントネーションによって話題への姿勢を示すとし、始め上昇して強く高く発音され急降下するイントネーションの「ソー」は、平板調の「ソー」より、会話相手の話題への興味を示していることを表すと述べている。また、上昇して急降下するイントネーションの「ソー」は話題開始部に、平板調の「ソー」は話題が始まって10分程経って会話が沈滞化したときに用いられると述べている。
- (22) 準備レッスン・ビジターセッション・反省会を取り入れることによって、談話能力の向上を目指した会話授業の実践報告については、中井(2003b)参照。

参考文献

- Emmett, Keiko. 1996. Contribution of the interactional markers *ano (o), eeto, uun (to) and nanka* to the development of Japanese conversation. *University of Minnesota: MA thesis*.
- _____. 1998. *ANO (O) is more than "um": Interactional functions of ANO (O) in Japanese conversation. Proceedings of the fifth annual symposium about language and society-Austin*, ed., by Mani Chandrika Chalasani, Jennifer A. Grocer and Peter C. Haney. SALSA V. TLF 39 136-148.
- エメット啓子 2001 『「なんか」 会話への積極的参加を促すインタラクショナルマーカー』『言語学と日本語教育』 南雅彦・アラム佐々木幸子編, 201-217 くらしお出版
- Goodwin, Charles and Marjorie Goodwin. 1992 Assessments and the construction of context. *Rethinking context*, ed. by Alessandro Duranti and Charles Goodwin, 147-189. Cambridge: Cambridge University Press.
- 林四郎 1960 『基本文型の研究』明治書院
- 市川孝 1978 『国語教育のための文章概説』教育出版
- Ikuta, Shoko. 1983 Speech level shift and conversational strategy in Japanese discourse. *Language sciences* 5 37-53.
- 今石幸子 1992 「電話の会話のストラテジー」『日本語学』11:9 65-72.
- Jorden, Eleanor with Mari Noda. 1987. *Japanese: The spoken language*. New Haven and London: Yale University Press.
- Kato [Nakai], Yoko. 1999 Topic shifting devices used in Japanese native/ native and native/ non-native conversations. *University of Minnesota: MA thesis*.
- 中井陽子 2000 「母語話者同士及び母語話者 / 非母語話者による日本語会話の話題転換部に使われる要素 情報提供者の場合」韓国日本学会と日本語教育学会共催第20回国際シンポジウム予稿集 158-165
- _____. 2001 「母語話者間による日本語会話の話題転換部に使われる要素」第7回社会言語科学会研究発表大会予稿集 101-106
- _____. 2002 「初対面母語話者 / 非母語話者による日本語会話の話題開始部で用いられる疑問表現と会話の理解・印象の関係 フォローアップインタビューをもとに」『群馬大学留学生センター論集』23-38.
- _____. 2003a 「話題開始部で用いられる質問表現 日本語母語話者同士および

- 母語話者 / 非母語話者による会話をもとに」『早稲田大学日本語教育研究』2 37-54
 _____ 2003b 「談話能力の向上を目指した会話授業 準備レッスン・ビジュア
 セッション・反省会を取り入れた授業を例に」『日本語教育方法研究会誌』10: 1
 20-21
- Nakai, Yoko Kato. 2002 Topic shifting devices used by supporting participants in
 native/ native and native/ non-native Japanese conversations. *Japanese Language and
 Literature*. 36: 1 1-25.
- Noda, Mari. 1981 An analysis of the Japanese extended predicate: A pragmatic app
 roach to the system and pedagogical implications. *Cornell University: MA thesis*.
 _____ . 1990 The extended predicate and confrontational discourse in Japanese.
Cornell University: Ph. D. dissertation.
- 南不二男 1972 「日常会話の構造 とくにその単位について」『言語』1:2 108-115 .
 大修館書店
 _____ 1983 「談話の単位」『日本語教育指導参考書 談話の教育と研究Ⅰ』国立
 国語研究所, 91-112 . 大蔵省印刷局
 _____ 1993 「述語文の輪郭」『現代日本語文法の輪郭』40-62 . 大修館書店
- 佐久間まゆみ 1987 「文段認定の一基準 (Ⅰ) 提題表現の統括」『文藝言語研究言
 語編』11: 89-135 . 筑波大学文芸・言語学系紀要
 _____ 1990 「文段認定の一基準 (Ⅱ) 接続表現の統括」『文藝言語研究言語
 編』17 35-66 筑波大学文芸・言語学系
 _____ 1992 「接続表現の文脈展開機能」『日本女子大学紀要文学部』41 9-22 日
 本女子大学
- ザトラウスキー, ポリー-1986a, 1986b, 1987 「談話の分析と教授法Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ 勧誘
 表現を中心に」『日本語学』5:11 27-41, 5:12 99-108, 6:1 78-87 .
 _____ 1991 『会話分析における単位について 「話段」の提案』『日本語学』10:
 10 79-96 .
 _____ 1993 『日本語の談話の構造分析 勧誘のストラテジーの考察』くろしお出
 版
 _____ 1998 「初対面の会話における話題を作り上げる言語・非言語行動の分析」社
 会言語科学会第二回研究発表大会七月 予稿集 23-28
 _____ 2002 「アニメーションのストーリーを語る際の話段と中心発話について」
 『表現研究』76 33-39
- 杉戸清樹 1987 「発話の受け継ぎ」『国立国語研究所報告92 談話行動の諸相 座談
 資料の分析』68-106 . 三省堂
- 鈴木香子 1994 『対話資料における話段の考察』日本女子大学修士論文
 _____ 1995 『内容区分調査による「話段」認定の試み』『国文目白』34 76-84 . 日
 本女子大学国語国文学会編